
マケン姫っ! ~無限を手に入れし者~

津禍霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マケン姫っ！～無限を手に入れし者～

【NZコード】

N7501T

【作者名】

津禍霧

【あらすじ】

目が覚めるとそこには何もない空間が広がっていた。突如死んでしまった少年は神様を名乗る怪しい女性の失敗によって死に、そして転生させられた！？少年の運命は神の失敗だけが知つてゐる……。基本は原作に沿つて進めて行きますが、オリジナルのストーリーも入れていきます。主人公は不幸で最強です（笑）さらに更新は一週間に一回が限度と言う亀更新です。主人公最強が無理な方や更新速度が遅えと思った方は戻るやクリアキーをワンプッシュしてください。

プロローグ（前書き）

処女作です。

一言でいうと駄文注意です（笑）。

これは無理と思われた方は、無理をせずに戻るやクリアキーをPushButtonしてください。

それではどうぞ。

プロローグ

目が覚めるとそこには何もない空間が広がっていた。

いや、『何もない空間』と言つには異彩を放つ『モノ』がそこにはあつた。椅子とテーブル、それに入れ。今自分がいる場所からは後ろ姿しか見えないが、綺麗な銀髪を腰の辺りまで伸ばし、体の線が少しばかり細いことから恐らく女性であると思われる。

だが彼女からは（中二臭いかもしけんが）人とは違う臭いがした。いや、している。ただ眺めているだけなのだが、彼女が怖い。否、本能的に彼女が危険であると、自分より位が高い『生き物』だと分かつているから見てているだけで『怖い』という感情が出てくるのであろう。

ならることは一つ。迅速にそれでいて静かに、気配を消して後ろにさがるだ「何をしてますの？」けではみそうにはないな、こりや……

その後なんやかんやあつたが（無視して後ろに下がつたり、聞こえない振りをして後ずさつたりなど）ついに彼女に従い（首根っこを掴まれながら引きずられ）、彼女の座る椅子の反対側に座つている。

しかし、あの細い体のどこにあんな馬鹿力があ「何か言いまして？」……今、心を読「みましたわ」……えつ？

「何を驚いているか存じませんが、私は貴方方人間がいう『神』と

呼ばれる存在でじてよ。」ねぐらこの」と出来て当たつ前ですわ。

「……思考が追いつけないんだが?」

「あら、なんで回転の悪い頭なのかしら。」

「煩い黙れ、そう思つなら俺の頭をもつと良へしてくれよ。てか、いきなり『自分は神ですよ』とか言つ奴に『そつなんぢやか』とか返せるかよー。」

「よろしくてよ。なら、それが第一の願いことうじてよろしくて?それと、随分硬い頭でし。」

「なんだといのやれ……う?」

「そう思いながら神(仮)の方を見ると顎に手を添え、その顔には不適な笑みを浮かべていた。

「それでは、第一の願いは頭を良くするつと。」

「一寸と待て。こや、待つてください、神様。」

「なんですか?私は貴方と違つて暇ではあつませんの。これでも多忙の神でし。」困惑する頭をフル回転させながら俺は神(仮)に疑問を投げ掛けた。

「こや、わざわざから言つての第一の願いってなんぞ?」

「読んで字の如くでしよ。あと、願いは一つありますよ。」

「……いや、待て。いきなり願い事を三つ叶えてあげると言われても意味がわからんのだが？」

「そう、意味が分からぬ。死んだ（と思われる）俺の願いを聞いて何のメリットがあると言つてだらう？ そんなことを疑問に思つていると神（仮）は呆れ果てた顔をしながら口を開いた。

「はあ、仕方ありませんわねえ。簡単に説明しますと、私の失敗で貴方は死んでしまい、それを帳消しにするために貴方を転生させる、優しい私はそんな貴方の三つの願いを聞いて差し上げようとしている、とこんな感じでしてよ。」

説明を聞き終えた俺は神（仮）に向かつて大きなため息をつきながら言つていた。

「……悪いのあんたじゃねえか、神様。」

「な、何を馬鹿げたことを仰いますのー？」

「いや、あんたが自分で言つたんだろ？『私の失敗で』って。」

頬杖をつきながら呆れた顔でそう言つた。ああ、またため息が。

「はつー…またやつてしましましたわー？」

「……あんた実は馬鹿だろ？」

「てか、今『また』って言わなかつたか？『また』って。」

「そんなことありません！ それと、『また』なんて言つてませんわ

！」

喋るのにも疲れはて心中だけで呴いていると、その呴きに反応した神（仮）がテーブルをバンバン叩いている。と言つか止めてくれ。さつきからもの凄く揺れてるから。

「大体貴方は何様のつもり何ですか！（バンバン）私は神でしてよ！（バンバン）その神を前にしてその氣だるそうな態度はなんですか！（バンバンカチッ）大体ですね、神は敬うべき……カチッ？」

突然神（仮）が動きを止めたと思つたら段々と顔が青ざめていき、何か大変なことをしでかしたのではないかと思い声をかけようとしたその瞬間。

「へつ？」

俺が座っていた椅子の下に黒い穴が現れ、重力（そんなものがあるのか分からぬが）に従い俺は落下していった。

プロローグ（後書き）

じんにちは、こんばんわ、そして初めまして作者の津禍霧です。
どうでしたか？

神様がああなたのは夜中の変なテンションのせいですよ、ええ。
さて、原作に入るまで作者は最低あと一話ほどかけるつもりです
が、大丈夫ですかね？（何とかしますがね）
そんなこんなで、また次回といつこで。ノシ

第1話 ～知らない世界で再出発（リスタート）～（前書き）

お待ちになられた皆さま、やつだない皆さま、お待たせしましたついに次話投稿です。

何かを語るのは後書きとしてついで、本編をじつぶ。

第1話 ～知らない世界で再出発（リストート）～

目が覚めると朝の爽やかな風が俺の男にしては長い髪を撫でていく。風の中には朝食の香りが混じつており、程よく目覚めた頭に空腹感を訴えさせる。

だが、現実とは非常なもので壁掛けタイプの『電波時計』を見た瞬間、気持ちの良かつた風は肌寒くなり、程よく感じていた空腹感はなくなってしまった。

そう、これがただの壁掛け時計ならこんな事にはならなかつたんだと思う。いや、軽くはなつていたかも知れないが現実は変わらない。

俺が見ている時計は『電波時計』であるという現実は変わらない
リアル

つまり、なんというか……余りにもテンプレ過ぎるから言いたくはないんだが……言うしかないのだろう……

「ち、遅刻だーー！」

神（仮）からボッショートを受けたあと、俺は普通に新たな人生を歩み始めた。

急に言われても意味がわからない？……簡単に言つとだ、『転生』して『赤ちゃん』になつて人生という名の長い道のりを再出発し始

めたのである。まあ、どんな気分かと聞かれたたらたつた一言『死にたい、殺してくれ』とだけ言つておこつ。

さて、それから数年（深いところは聞かないで）は暇ではないが、何かが抜けたような生活を送つていた。

そう、前世でヲタク的な趣味を持つていた俺には幼児がする遊びなど樂しめるはずもなく、しかし独り遊びをするほど俺の精神は団太くはなく、……つまり何が言いたいかというとだ、『時間を無駄にしているだけ』という感じがしてならなかつた。

しかも、神（仮）はいきなりボツシュー！トしゃがつたせいで、何の世界のどんな時期ですら分からぬという状態だ。これでは身動きき一つ取れない。

神からの連絡が入つたのは、そんなことを密かに思い始めたころだつた。

『連絡』と言つても夢の中で対話した訳でも、突如見知らぬ住所から手紙が届いた訳でもなく、普通に電話をしてきたのである。しかも、両親が共に居ない日。

電話の内容は長くなるので割愛するが、要約すると、『数日後また連絡をしますから、その時までに願い事を決めておいてください。今回の失敗の分もあわせて五つの願いまで構いません。』とこんな感じのことを小一時間話、いや正確には十分程話した後、神（仮）の仕事の愚痴を聞かされた。

この時の俺は、『数日後までに願いを五つ考えなくては』と思つていた。後、愚痴は一度どじめんだ、と強く思つた。

しかし、待てど暮らせど神（仮）からの連絡は一切なく、現在の中学三年の今現在になつてもその前触れすらないままである。

と、まあ今までの回想をしながら俺は朝食をとらずに家を出て、今は学校に向かって全力全開のダッシュショ�行っている。

そのままのスピードを維持出来れば間違いない、学校は余裕とまで行かないが間に合つてある。

いや、悪いこれは嘘だ。正確には『一時間目には間に合つ』、だそれにしても、とふと走るペースを落とさないよう気をつけながら考える。

あの神は確かにドジることが多い印象をたつたの数秒で得たが、（勝手なイメージかもしけんが）時間や約束はしっかり守るタイプに思えた。

そんなヤツが約束を破つたりするだろうか？

それとも、俺との約束より大事なようが出来てしまつたのだろうか。

そんなことを考えながらも俺の足は進み、遂に校門を視界の中に映すことが出来たその時、ポケットに入れてある携帯が震え出した。中学生になつて直ぐに買つてもらつた携帯は一年と少しの月日が流れ、そろそろ機種変も辞さない状態ではあるが、まあまだ大丈夫だろう。

とりあえず誰からの連絡かを確認して、それから校門をくぐつても大丈夫（諦めが肝心）であろう。

そう思い、携帯を取りだし、確認するためディスプレイを見た瞬間だった。

『あら、随分電話に出るのに時間が掛かりましたわね？』

「はあ？」

一寸待て。いや、諺で『噂をすればなんとや』と言つたつするが、これは可笑しい。

あの数年間連絡を寄越さなかつた神（仮）が連絡を寄越した？通話ボタンも押さずにいきなり通話開始？いや、通話はどうでも良くないけど今は良い。

『私は確かに、数日後また連絡を寄越すと言つた筈ですわよ。』

『ん？今この神（仮）はなんと言つた？』数日後また連絡を寄越す？

「はあ？何言つてんだよ、神様。いつでは数年たつてるぜ？」

『何を仰りますの！？確かに私は数日たつてから連絡をさせていただきましたわ！』

……成る程またいつもの『アレ』か。ああ、つまりはそういう事か。

だが、神（仮）にも誇り（プライド）ってものがあるはずだ。全て神（仮）が悪い訳じゃない（悪いと思つが）。

中学生という半分大人になつた俺ならきっと許せるはずだ。だが、俺はあえてその誇り（プライド）を碎いてやるつ。

「なあ、神様。」

『なんですか？まさか、まだ願いが決まつてないと仰るつもりですか？』

「いや、そんなことはない。一応は決まつている。でもな、それより大切なことがあるんだ。」

『なんですね、五つの願いよりも大切なこととは?』

そこで俺は少し息を吸う。大切なことだ、神(仮)に聞き間違えがないようにしないとな。

そしてゆっくりと息を吐き、神(仮)に語りかける。

「そつちでは数日かも知れんが、二つちでは数年たつたんだぜ、駄女神様。」

俺と神(仮)、改め駄女神との間に静かに沈黙という見えない壁が出来た。

まあ、なんとなくそんな気がしていたから別段咎めたりしないが、駄女神のフリーズがとけるのを待つとしますかね。と思いながらふと思い出した。

「そういえば、ここって何処の世界なんだ?教えてもらひてないんだが。」

『えつ。』

こうして、駄女神のフリーズ時間は延びていったのである。……
てか、本当に何処なんだよこの世界。

第1話 ～知らない世界で再出発（コスター）～（後書き）

さて、本編第1話（プロローグを含むせて2話目）を読んでください
った跡をま、ありがとうございます。

作者的には「あれ、どうしてこうなった？」や「急展開すぎやしないか？」という感じがしましたが、読者の跡をまどうでしたか？
予定と違いました原作に入れないので、どう感じの終わらしかた& 次話に続けにくい終わらしかたとこう……
本当、どうしよう。

それでは、また次週をお楽しみにして下さい。

第2話 ～天を契んだ日……かな？～（前書き）

どうも一週間ぶりです。

楽しみに去れていった方お待たせしました、そしてそうでなかつた方
暇潰しにどうぞ。

それでは、楽しんでいってください。

第2話 ～天を契んだ日……かな？～

「東南中出身、しののめ 東雲 とうが 桜花。ただの人間には興味はねえ、この中にヨタク、厨二患者、変態がいるなら、俺のところに来い！」

そう言つて俺は辺りを見渡した。

ふむ、出だしはこれでよし、だな。などと思いながらもう一度息を吸い、「以上！」とだけ言い自己紹介を締め括つた。

そうこれはあの日、駄女神からの電話があつてからほぼ一年たつた、『とある』高校に入学した時の俺の自己紹介だ。

はつきり言つと今ので空氣は死んでしまつた。何故だ？別に滑つた訳でもないのに、全く検討がつかない。……まさか、皆このネタを知らないというのだろうか。

まあ、今はそんな些細なことはどうでも良い。

周囲から生暖かい視線を感じながら、俺はふとあの日の出来事を思い出しながら、右のポケットを軽く叩いた。

駄女神から電話があつたあの日、俺の人生は七割決まつてしまい、残り三割は不安定なものになつた。

……というよりも、神（駄女神にあらず）によつてある程度その人生は俺が転生したその日から決まつていたらしいが、今はそんな事はどうでも良い。

とにかく、駄女神が再起動した後の俺たちの会話内容は割愛して、

重要な部分だけを話そう。

重要な部分と言つても、内容は大きく別けて二つ。

一つ目は、今俺がいる『世界』について。まあ、悪い話ではなかつた。

駄女神の話では、『何処の世界に落としたかも判らず、数日探す羽目になりましたわ。』と愚痴られた。

さて、そんな事はどうでも良いんだが、世界についての話しの続きたが、結論から言つとこの世界は『マケン姫っ!』というマンガの世界だつた。

これは俺にとつて嬉しい誤算だつた。『マケン姫っ!』は知らないマンガではなかつた。

まあ、好きか嫌いかで聞かれれば嫌いな部類に入るマンガではあるが……

どうせ似たような内容ジャンルにするなら他のマンガが良かつたんだが、自分の知らない世界でないのでよしとする。

……はあ、ハーレムって嫌いなんだけどなあ。

それは置いといて、二つ目は一つ目と違い、誤算の塊みたいなものだつた。

そう、駄女神が言つていた『五つの願い事』についてだつたのだが、この時点すでに誤算があつた。

と言うのも、まず『神』が『願い事を叶える』と言われた場合、俺の偏見のせいかもしれないが『五つの願い事』が『絶対に叶う』と思つてしまつていた。相手はあの『駄女神』だというのに。

……何が言いたいかと言つと、『駄女神』が用意出来たうち『三つは必ず叶う願い事』で、残りの『二つは努力の末、実現する願い事』だつた。

今さら嘆いても仕方なく、更に自分に憑いている神があの『駄女神』なら仕方ないと割りきり、『三つ』の願い事をしてその日は電話を切らしてもらつた。

ついでに言つと、願い事は秘密だ。何故なら、その方がカッコイ

イから。

とまあ、そんな経緯（どんな経緯だよ）で俺は元名門女子学園にして、本年度より共学になつたこと、『天田学園』に入学し冒頭の自己紹介をしたのであつた。

因みに入学式は終わり、時間的には主人公が保健室にいる間に自己紹介などはすんでいった。

まあ、前途多難な学園生活になるんだが……

「ま、退屈凌ぎにほなりそつだな。」

そう言ひながらもう一度右のポケットをさつきよりも少し強く叩いた。

第2話 ～天を契んだ日……かな？～（後書き）

どうも皆さま。

今回の話はやつと天日に入学ですよ、はい。

本当は第1話で入学の予定だつたんですけど、あれえ？
そんな事は置いといて、次話は遂に『ヤツ』が姿を表す……かもしれない。

更に主人公の初戦闘がある……かもしれない。
どつちも『かもしれない』が大切です。

……関係無い話ですが、主人公のプロフィールって要りますかね？
それではまた次回。

第二話 ～さて、介入を始めますか～（前書き）

どうも一週間お待たせしました。待つてない方も。
さて、ついにヤツの正体が明らかに！？

それでは本編をどうぞ。

第二話 ～さて、介入を始めますか～

「一巻の物語？ふうん、そんなモノとうの昔に過ぎ去ってしまったわ！」

「ぐう！なんてことだ！」

「そうだ、その顔だ！クハハハ！さあ、物語は一巻から始まるぞ！」

『頑張つて！もう、独りの君！負けないで！』

「……ああ、そうだな。俺たちは負けれないぜ！行くぜ！相棒！」

『うん！もう、独りの君！』

そして、俺たち……いや、俺は最強を目指して歩み始めた

なんて夢を見た今日この頃。どうも、東雲 桜花だ。

さて、冒頭のあれは無視して唐突に現在の状況を説明。

今俺は天日学園の寮で起床したばかり、時間は午前四時。こんな時間に起きて同居人のことを考える、と言いたいがそんな心配は無マンタイ問題。

何故なら俺は『独り部屋』（誤字にあらず）だからだ。

本来は何故かは知らんが、原作主人公『大山 武』と相部屋の予定だった。

しかしまあ案の定、武は四人部屋に逝ってしまったため、ここで一悶着。元『姫神コダマ』の相部屋の奴に厄介にならうとしたところ、拒絶。……と言つか、取り合つてすらくれなかつた。

さらに、他の部屋に空きはなく仕方なく『寮の横にプレハブを建て』、そこで俺『独り』で暮らしている。（プレハブが建つまでテント暮らしを強いられたりもした。）

さて、俺の部屋割りも伝えた（誰得？）ところで、何故俺がこんなに朝早くに起きたのかと言つと、……テンプレ的なノリの秘密特訓だつたりする。

秘密特訓をする理由は……深くは語らないが分かりやすく言つと『ヤツ』のせいである。

そんな訳で誰にも知られないよう、特訓を五時近くまでし、寮に戻り、朝食を取り、そしてギリギリまで一度寝をキメ、登校（たまに遅刻しかける）する。

そんな生活をほぼ一ヶ月続け、遂に五月に到達した！
……えつ？一巻つて何？

「不審な暴力事件？」

そう言いながら、友人A（モブの名前など知らん）の方を向き、さも興味が無さそつた風を装つ。内心では興味津々である。

「そつ。」

軽い返事と共に、自前のPCから顔を上げてこちらを見てくる友人A。微妙にイケメンなのがムカつく。

「僕も他人から聞いただけだから詳しく述べ知らないけど」

そう前置きをして友人Aは事件の内容をかいづまんで話してくれた。

曰く、立ち会い人がおらず決闘ではない。（天田学園では生徒間の揉め事は決闘で処理する。）

曰く、被害者の生徒は事件に関する記憶をなくしている。と不審な点が多くすぎるため、『不審な暴力事件』となっているらしい。

まあ、そんな事を聞いた俺の感想は『成る程、一巻の始まりか』と思つた程度だつたりする。

……がしかし、これは良い機会であるかも知れない。

ただでさえ、武とは違うクラス。話した事がない訳では無いが、部屋割り変更時に少し挨拶を交わした程度だ。

なら、どうすれば俺は主人公たちの枠に入る事が出来るか。

……答えは簡単だ。この事件を皮切りに俺もマケンキ（正式名、魔導検警機構）の一員になれば良いんだ。

そうと決まれば、今日の放課後は人気のない場所で張り込みをして……いや、でも……

「……はあ。ま、桜花なら大丈夫だと思うけど……お気をつけて。」

「おう、了解。」

そう応えながら、俺は頭の中であーでも無い、こーでも無いと張り込み作戦を考えながら右ポケットを叩いていた。

「と言うわけで、やつぱし体育館裏だったか。」

まあ、俺の推理どうりだつたつて訳……すいません、言い過ぎました。ただ原作を知っているから分かっただけです。今はそんな事は置いといて、俺は今日の前で起こっている事に田に向ける。

簡単に説明すると、一年生の網緒先輩だつたはずが水屋みなやつるひと武を捕まえたところ……なんだが。

「あの余裕綽々の顔が、腹立つ。」

と小声で呟き、乱入しようとするが、作戦のため断念する。作戦とは簡単なもので、ギリギリのところに参上、『やべえこいつカツコイイ』的な事を思わすのが、俺の考えた完璧（自称）作戦である

「黙つて見てなー！」

その声と共に何かを叩く音がすると同時に、俺の作戦は終わりを告げ、

「いや、楽しそうなことしてますねー。俺も混ぜてやることよ。」

そう言いながら俺は物陰から飛び出し、網緒先輩から武たちを守るよう登場する。

「……アンタは？」

そう言いながら警戒心を剥き出しにしながら網緒先輩は問いかける。後ろにいる水屋も同じく、状況についていけない武は無視するとして。

「俺か？……俺は」

ゆつくりと余裕を持つて右手をそのままポケットに入れ、『ヤツ』を掴んで取りだしながら、

「一年、東雲 桜花！そして我がマケン」

「魔^{カレイド}權^{ルビー}ルビー！」

突き出した右手には、魔法少女たちが握つていそうなファンシーな杖が握られてられていて、

『さあさあ、私ことミラクルマジカルステッキ』カレイド ルビーと、マスターである桜花さんが揃えば、皆さん揃つてデストロイ「するなよ」……もう、分かっていますよ桜花さん。』

そのファンシーな見た目からは想像出来ない威圧感を放つていて、そして喋っている。

それは仕方ないことだろう。なんたつてルビーは現段階では最強のマケンになるであろうマケンだ。そんなマケンから威圧感が放たれない訳がないだろ？

「さて、あんたらの闘いに乱入するつもりはなかつたんだが……」

『女性の顔を叩くのは頂けませんね』

「唔然としながら俺を いや、俺たちを見ている三人を無視して、

「だから、」

『『『』』』から先はお仕置きタイムだ（ですよ）』

そう言い放つて、ルビーを持つ右手に力を込める。

「さあ、シヨータイムだ。」

第三話 ～さて、介入を始めますか～（後書き）

ヤツの正体はルビーだった！

とまあ皆様分かりやすかつたですよね～

ついにルビーの参戦。

これで桜花の敗けはほぼなくなりました。（笑）

……戦闘まで行けなかつたのが悔しいですが、ね。

さて、それではまた次回をお楽しみに。

第4話 ～初戦闘？～（前書き）

長らく更新をストップさせてしまって、すみませんでした？
リアルの用事で書けなかつた次第であります、これからは以前と
同じく週1のペースで書いていきますので、どうぞよろしくお願ひ
します？

第4話 ～初戦闘？～

戦闘なう。 どうも東雲 桜花だ。

冒頭に書いた通り只今、絶賛戦闘中だ。 ならなんでそんなに余裕があるんだ？と聞かれると、早い話が『ちょ、それで全力とかマジワロス^W』てな状況だからだ。

考えてもみて欲しい。 ただでさえチート武器の“ルビー”。 ここまでなら良かつたものの、相手のマケンの能力は『行動制限及び拘束』と言う感じだ。

さて、ここまで言えば分かると思うが、俺と網緒先輩の相性（マケンの能力的意味）は最悪なのである。

例えば、網緒先輩のマケンで俺が動けないとしても、俺は固定砲台として魔力弾や魔力砲を撃てば良い。

よつてこれだけの余裕が生まれた訳だ。
まあ、流石は一年生と言う事もあり、網緒先輩は直撃せずに回避し続けていたりする。 それには素直に驚いた。 モブキャラの底時からを垣間見たぜ、的な。

そんな訳で俺は魔力を、網緒先輩は体力を消耗していっているという構図になった。

「…とはたから見ると思ったかも知れないが、戦闘中の俺には…」
いや、俺たち（俺とルビー）にはそうは感じられなかつた。

そう、俺の相棒“ルビー”的能力はチートの一言につきる。 神様曰く、『原作での“ルビー”的能力がそのまま再現されていますわ。』
『のことだ。 つまりはこの魔権^{カレイド}“ルビー”にとって『魔力の消費』と言つ事など何と言つ事のない些細な事なわけだ、

「ギアを上げるぜえ！…ルビー！…」

『ああ、そんな… まだ激しくなるなんて… ダメ…！ 桜花さん

！－－ こんな、こんな人前で「黙れよ、馬鹿ルビー WWW」もつ
ノリが悪いですよー、桜花さん～』

「こんな馬鹿みたいなコントをしながらでも、今までよつも一回りは
大きな魔力砲（ヒーメント）を放つた。

…… そう、放つてしまつたのだ。

－－ もし、もう少し俺が冷静な判断を下せていたら…… あんな悲
劇は起こらなかつた筈（ハズ）だつたのに……

そう、俺が放つた魔力砲（ヒーメント）は網緒先輩による網緒先輩がな
し得た最善の行動－－俗に言つ回避によつて、網緒先輩の後ろにあ
つた『体育館の壁』に着弾し、あらう事か壁を『爆散（ボクサン）』させてしまつ
た『（ハズ）のだ……

『あ、すいません。 ギアを一段どじろか二段ぐらこ上げちゃいま
した。』『じめんなさい、桜花さん』

そつルビーが謝罪するのと、

「みんな、大丈夫！？」

天谷春恋（ヒロイシ）が到着するのと、

「やつ過ぎだあ……馬鹿ルビー……」

俺が叫び声をあげるのはほほ同時だつた。

…… マケンキ入りは無理ほな気がするなあ～…… はあ～

「あはは、わけわかんないよ。」

そう言って笑う少女は先程、一方的な暴力を行つた少年・東雲桜花が連れていかれる様を眺めていた。

「あれだけ強いんだつたら、ちょっとは抵抗したらいのにいの……」

表情は膨れつ面に変わつてはいたが、また表情を笑顔に変えると、

「待つてね、桜花君。だいき 絶対、ぜええつた! 助け出してあげるからねえ。」

虚ろな目は何も語りづ、その瞳にあるのは只々少年の事だけおつかだった。

「こんな馬鹿みたいな世界からあ。」

物語は動き出す。

終わりは見えず、深い闇へと進んで行く。

第4話 ～初戦闘～（後書き）

短い…ですよね。

つ、次からは3、4ページぐらいにはなるんで許して下さい?

それと、スマホに代わったせいで仕様が少し変わっています。
読みにくいかも知れませんが、お許し下さい。

それでは、また次回?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7501t/>

マケン姫っ! ~無限を手に入れし者~

2011年12月25日23時02分発行